見上げれば夜空には鈍色の星が瞬く。完全な輝きにはなりきれないそれらは、まるで今の野分の心境をそのまま映し出しているようだった。

草間野分がこの上條の屋敷にやってきてから、既に十二年の歳月が経過していた。野分は現在齢十七。ここに来る以前は施設で日々の暮らしを営んできた野分は、身寄りのない自分を引き取ってもらったことに対して上條の両親に多大なご恩を感じていた。

しかし、事はそう単純には運ばなかった。とはいえ、野分が来たせいで家族が不仲になった、などという類のものではなかった。現に野分はごく自然に家族の中へと溶け込んでおり、この家の息子である弘樹ともとても仲良くなっていた。新たに兄となった四つ年上の弘樹は、些か口は悪くとも真面目かつ情に厚い性格で、突然できた弟に対しても温かい愛情をもって接してくれた。常に一生懸命で面倒見の良い弘樹は、直ぐ様野分にとってよい兄となっていた。

しかし、今の野分は彼らに対しある種裏切りともいえる感情を抱えていた。それは両親と弘樹、そのどちらに対しても到底受け入れてもらえそうもないものだった。厳密にいうならばそれはごく最近のことではなく、野分が彼らと出逢ったときには既に野分の心の苗床には種は蒔かれていたのだ。それが年月とともに野分が自覚できるまでに成長しただけだった。

そう、野分は兄である弘樹に恋をしていた。身を内側から焼き尽くすような激しい想い。既に限界点を突破してた弘樹への感情は、最早持ち前の精神力だけでなんとか持ち堪えている状況だった。熟しきった果実からは噎せ返る程の香りがしていた。

腐敗間近のじゅくじゅくになった果実は、誘惑の香りを漂わせながら果肉をボトボトと滴らせる。ねっとりと絡みつくような甘い芳香は、野分の理性を見る間に奪い去っていった。

辺りに人通りは途絶え、街は完全に寝静まった午前二時。一人ベッドから起き上がった野分は、足音を立てぬように細心の注意を払いながら、隣にある弘樹の部屋へとそっと忍び込んだ。

そこには昼間見るよりもあどけない表情をした弘樹が眠っていた。シーツに散らばる茶色の髪。野分は眠る弘樹に近付いて、その唇に自らのそれをそっと押し当てた。